

老子と『道德経』及び「環境問題」の解決 ()

『道德経』における「自然」

耿

順

一 「自然」の誕生

今日、「自然」という用語は多くの分野及び多くの人々によく使用されている。殊に、いわゆる環境問題の解決に様々な使い方があある。例えば、「自然破壊」、「自然再生」、「自然保護」、「自然環境」、「自然科学」、「自然物」及び「自然法」、「自然哲学」などがある。ところが、この状況は単なる学問だけのことならば問題視する必要がないと言える。けれども、その認識に基づく使い方によって国家及び国際的な政策が作成され人類社会の動きが誘導されていることなどの現実を見て、環境問題を解決する前にそれをもたらす認識における錯誤を発見して実際に合うように見直す必要があると考えられ、特に人類の存続に関わっていることについて、そのため検討する必要があると考えられる。

東西を問わずに、いわゆる人類文化史において「自然」という用語を考察すれば、今日調べられる範囲で、それは老子が『道德経』に初めて使用したことが判る。換言すれば、即ち老子が物事の「自然」を発見して「自然」という二文字を使って

その「自然」を世間に明かしたとのことである。

『道德経』において、「自然」は「道」の本性としての位置が与えられている。即ち、「道」は「自然」という本性に基づいて演変し、「一を生じ、さらに一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ずる」ように生々不息を迎え、また芸々たる「万物は復其の根に帰す」ように滅々不止を送去しているという万物并作より万物并亡への生々滅々を演示しているのである。

このいわゆる老子の「自然」観は、今日に至るまでの2500年ほどの間に、黄河流域をはじめ世界へと広がり、特に中国の社会形成や人間社会の行方などにその例を見ない大きな影響を与えつづけてきた。


以上の状況に基づき、次に『道德経』における「自然」という用語について考察及び筆者なりの検討を加えて見る。

二 『道德経』における「自然」等

1 「自然」とは何か

自然という用語は、『道德経』で登場して以来、色々の解釈及び

様々な使い方があり、なお今日の様々な字書に多くの解説などがある。

ところで、「自然」は言うまでもなく、自と然の二字によるものであるので、先ずこの二文字各自の原義を見てもみる必要がある。だが、周知のように、中国語の文字が約 4000 年前の象形文字（主に陶器や甲骨に遺ってきたもの）から発展してきたものであって、自と然はそれぞれ、何を表すために造られたかなどのは別にして、今日において約 2500 年前老子が『道徳経』に使ったその意味を確実に理解することは難しいと言える。けれども、いわゆるその原義を知るため、約 1800 年前作成された『説文解字』の解説を参考にしておく。即ち、自は鼻であり鼻の形に似ているとのことであり、なお「𠂔」、「𠂕」と、そして甲骨文字として「𠂔」、「𠂕」などと書く。この意味よりか、その人自身、さらにその物事自体を表すようになった。また、然は燃えることであり、などと書くとのことである。

これらの考えによって考えまとめて見れば、「自然」はその「人自身」又は「物事自体」が「然（す）る」又は「燃える」などと理解することができる。

2 「自然」の使用と意味など

「自然」という用語は、『道徳経』において五回ほど使用されている。今日の理解における特徴から見ると、残念ながら定義的な使い方はなく、やや解り難いように思われる。ここでは、検討を行うため関係のある段落を直訳して引用するうえで検討を加

える。なお、訳文による原義の逸脱を考えて、原文を（ ）に加えておく。また、数字による見出しは、筆者が便利のため加えたものである。

「百姓は皆

我は自然であると言う」

大上は、知られないのである。その次は、親しまれて誉められる。その次は、畏れられる。その次は、侮られる。信じられるのには足りなく、尚信じられないことさえある。なんと云ったら良いのか、それは言を貴（つつし）むべきである。功を成し事を遂げて、百姓は皆、我は自然であると言う。
（大上，不知有之。其次，親之譽之。其次，畏之。其次，侮之。信不足焉，有不信焉。悠兮，其貴言，功成事遂，百姓皆謂我自然。）

この段落は、人の品位を四等級（最高は知られない人、二等は親しまれて誉められる人、三等は畏れられる人、最低は侮られる人）に分け、それによってそれぞれ百姓（人々）からの扱いを示し、世間人情を述べたうえ、良い扱いを得るために、言を貴むという最善の対応方法を明らかにしていると言える。

また、「自」は「我」であり「然」は「功を成し事を遂げて」であって、即ち我が自力で成し遂げたとの意味である。こうして、この「自然」は、管理、教え、指導及び加害などの他力がなければ問題なく実現することである。なお、実現するには、他力にとって「言を貴む」との必要がある。これは、いわばその人間その自身によるという「人間自然」である。

「希に言うのは自然である」

希に言うのは自然である。飄風は朝を終（こ）えることができず、驟雨は日を終えることができない。これを為

すのは孰かと言え、それは天地である。天地でさえ久しく為すことができないので、更に人なら、言うまでもない。(希言自然。飄風不終朝，驟雨不終日。孰為此者？天地。天地尚不能久，而況於人乎？)

この段落での「希に言うのは自然である」とのことは、(人々)が無理矢理に余計なことを言(行)わなければそのこと自体が自然であると明瞭に示している。この「自然」は、その人自身の行為に係ることであって、いわば「無為自然」とのことである。

また、天地は飄風や豪雨を起こすことができるけれども、それを永くすることができない。人間は無為自然か又は有為活動かを選択することができるけれども、さらに遙かにもっと天地よりも永くすることができないと忠告している。

「爵されることなく

恒に自然である」

道が生じ、徳が蓄(やしな)い、物が形(な)って器が成る。これにより、万物は、道を尊び徳を貴ぶ。道の尊く徳の貴いのは、爵(しゃく)されることなく、恒に自然である。(道生之，徳畜之，物形之，勢成之。是以萬物莫不尊道，而貴徳。道之尊，徳之貴，夫莫之爵而恒自然。)

この段落は、万物が道を尊び徳を貴ぶこと、即ち道に生じられ徳に蓄われる理由を明らかにしている。また、道が尊ばれ徳が貴ばれるのはその自身の尊貴たる地位と作用によるので、他の何かによることではないことを示している。なお換言すれば、万物にとって道の尊く徳の貴いのは、道徳

の永久的な自然、いわば「自然而然」とのことである。

勿論、このようなことは、人事と異なるので、爵されることがないのである。

「聖人が万物の自然を輔う」

為す者は敗れ、執る者は失う。これにより、聖人は為さないの敗れることなく、執らないので失うことがないわけである。故に、事に臨む紀(とき)に、始が若く終に慎むと敗れることがないのである。聖人は、欲しないことを欲して得難い貨を貴ばず、学ばないことを学んで衆人の行い過ぎを復する。これを以て、聖人は万物の自然を輔(おぎな)い、敢えて為さないのである。(為者敗之，執者失之。是以聖人無為故無敗，無執故無失。民之從事常於幾成而敗之。慎終如始則無敗事。是以聖人欲不欲不貴難得之貨，學不學復衆人之所過，以輔萬物之自然而不敢為。)

この段落は、必然的因果を明確にして聖人不敗の道理を明示している。なお、聖人が終始一貫して慎む行為及びその欲や学の特徴など、即ち聖人が無欲無為によって万物の自然を補うという自然を明らかにしている。

これを換言すれば、万物は人間から犯されなければそのままであって、即ち自然である。これは、いわば人間の無欲無為によって守られる「万物自然」である。

「道は自然を法する」

状がある。それは混成していて、天地より先に生じ寂寥(せきりょう)としており、独立して改めず天下の母と為すことができる。その名は未だ知られておらず、字(あざな)を道と言う。吾

は、強いて名を大と言ひ、大を逝(せい)と言ひ、逝を遠と言ひ、遠を反と言ふ。故に、天は大であり、地は大であり、道は大であり、王は亦大である。域には四大があり、王はその一を居(し)めている。人は地を法し、地は天を法し、天は道を法し、道は自然を法する。(有状混成、先天地生。寂兮寥兮、獨立不改、周行而不殆、可以為天下母。吾不知其名、字之曰道。強為之名曰大。大曰逝、逝曰遠、遠曰反。故道大、天大、地大、王亦大。域中有四大、而王居其一焉。人法地、地法天、天法道、道法自然。)

この段落は、道と名付けられたものの特色として「状」、「混成し」、「天地より先に生じ」、「寂寥とし」、「独立して改めず」、「天下の母と為すことができる」、「名が大、大が逝、逝が遠、遠が反へと発展するという特徴を示している。なお、域にある天、地、道、王という四者における王の存在を強調している。さらに、人から地、地から天、天から道へと、いわば人、地、天、道が自然を法するという「法自然」の法則を明示しているのである。

また、「人は地を法し、地は天を法し、天は道を法し、道は自然を法する。」という文の構造及び「自然」の意味などを考察してみれば、次のことを理解することができる。

まず、文の構造において人 地 天 道という法する構造であり、なお地 天道「自然」という法される関係である。また、すでに触れたように、意味から見て、もし「自」は「その物自体」を指し「然」は「する」意味として理解すれば、道にはそれなりの「自然」があれば、天にも天なりの自然、地にも地なりの自然、人には人なりの自然

があるはずである。さらに、人と地と天と道にそれぞれの自然があれば、この共通的な「自然」による「自然界」が構成され、即ち一つの「自然界」があるのである。これを概念図で表せば、次の「自然界図」のとおりである。

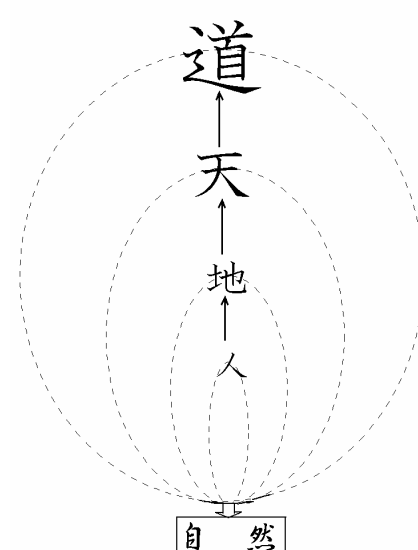


また、この自然界図が表しているように見れば、そして人と地と天と道の「自然」における「自」を人と地と天と道

として見たら、それがその「自然」と同一物になり、即ち同じ物における二つの表現になるのである。こうなると、次の「法自然図」のように表すことができる。即ち、文の構造

によって示されている人 地 天のように逐次に法していくことのほかに、実際には構造的に見て、この構造において人にとっては地を法すると同時に天も道も法し、同様に地にとっては天を法すると同時に道を法しておりなおこれと共に、人も地も天も道のようにその「自然」を法していることに

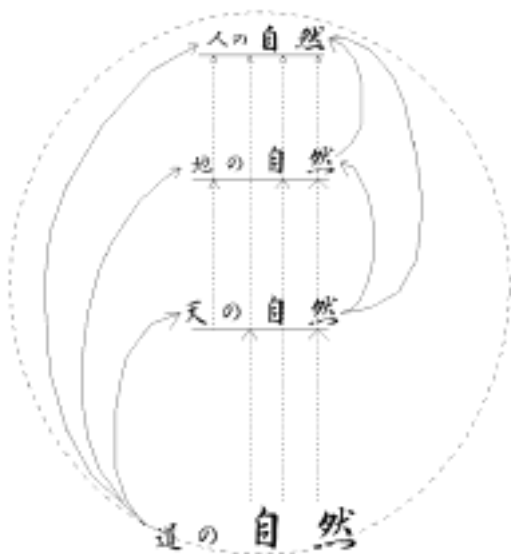
法自然図



なっているのである。

以上は、人と地と天と道の立場から「自然」を法することによって「自然」の存在特質や関係の二者間の関係を見たものである。けれども、「自然界図」で示されているように、いわゆる道には道の自然、天には天の自然、地には地の自然及び人には人の自然があって、そしてその「自然」の「自」はその道などの一部ではなくてそれなりの「自」であれば、道などとその自然との間の関係は実際同一物における二つの異なる表現である。なお、この異なる表現の相違を見分けてみれば、道などはその物の名字であって道などの同義語としての「自」に「する」意味の「然」を付ける「自然」はその物の存在特質を表す表現であると言える。こう理解すれば、言うまでもなくその「自然」は他の物、即ち他の「自然」に作用することがある。この作用関係を概念図にすると、次の「自然作用図」の

自然作用図

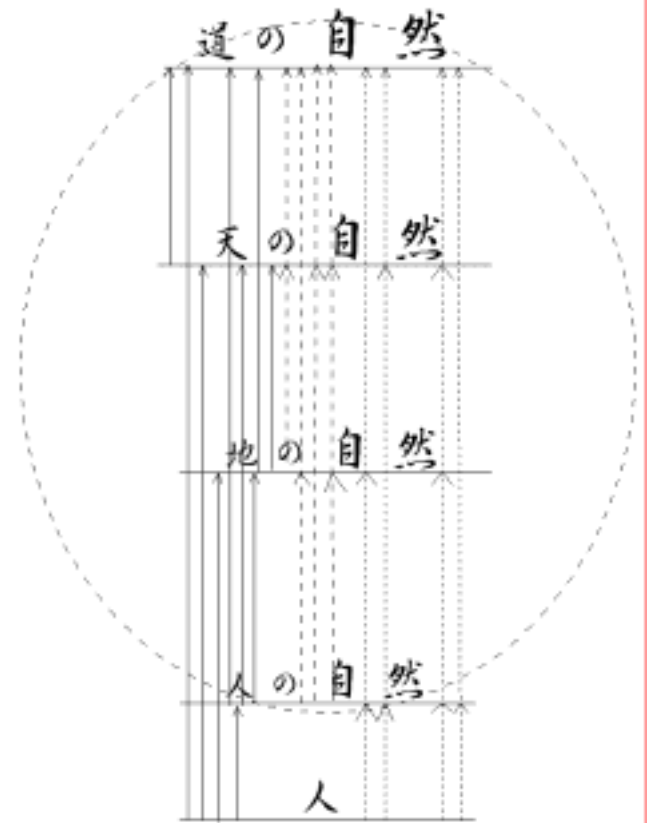


また、同時に特色として多重の作用関係がある。

さらに見てみると、実際には自然間の作用関係があるだけでなく、人が自然に

作用する関係もある。なお、この関係を概念図で表せば、次の「人の自然作用図」のとおりである。なお、この概念図における点線は間接作用し、実線は直接作用することを表す。また、同時に多重の作用関係のあることは特色である。

人の自然作用図



三 「自然」の意味などに関するまとめ

以上のいわゆる『道德経』における「自然」に対する考察及び検討により、それには人間社会における「人間自然」、人間行為における「無為自然」、法則としての「自然而然」、自然物との関係における「万物自然」及び人間活動などの基準としての「法自然」などの基本的な意味等があると思われる。なお、自然界に居る人間として他の自然物との間に複雑な関係があることが分かる。